

現代ロシアの政治変容と地方：沿ヴォルガ地域における圧倒的一党優位の成立過程, 1991-2011

著者	油本 真理
学位授与年月日	2013-09-24
URL	http://doi.org/10.15083/00006295

論文の内容の要旨

論文題目

現代ロシアの政治変容と地方
沿ヴォルガ地域における圧倒的一党優位の成立過程, 1991-2011

氏名 油本 真理

本研究は、体制転換期以降、20年余りの間に生じたロシアの政党制の変容を、主に地方レベルの動向に注目して描き出そうと試みるものである。

この間のロシア政治はダイナミックな変化を経験した。1990年代においては野党が強く、与党の定着は困難な「安定与党の不在」に特徴づけられていた。その一方で、2000年代に入ると、2001年に結成された与党「統一ロシア」が急速に浸透し、2007年頃をピークに圧倒的な優位を占めるに至った。ここに、このような変容は、具体的にはいかなるメカニズムで生じたものなのか、そして、このプロセスがこれほどまでにラディカルであったのは一体なぜなのか、という疑問が生じる。

この疑問について、既存の研究においては、主に、政治制度、政治と社会の関係、社会経済状況などに注目した説明が試みられてきた。多くの論者は、「統一ロシア」の伸長を後押しした要因として、2000年代に入ってから行われた選挙や政党をめぐる制度の改革や、プーチン大統領下での権威主義傾向の強まりなどを指摘してきた。また、体制転換を経て顕著になった生産の落ち込みが1990年代末から復調に向かったことを受け、社会経済的な要因が、1990年代における与党陣営の不振および野党の躍進、そして、2000年代に入ってから政権与党の支持拡大に一役買ったとの議論もある。

これらの観点は、確かに、ロシアにおいて「圧倒的一党優位」が成立するに至った背景を大まかには説明するが、その実際のプロセスが十分に明らかになるわけではない。そこで、本研究においては、ロシア政治のマクロな変化を下支えしていたミクロなアクターと

して、政党・選挙ブロックの実働部隊、すなわち、選挙マシーンとして機能してきた地方エリートに焦点を当てる。彼らは地方レベルにおいて実際の政治の担い手となった人々であり、既存の研究においては一枚岩的なイメージが強調されるか、あるいは与野党間の二項対立的な図式で捉えられることが多かったが、本研究では、州行政府、州都行政府、共産党地方委員会の三者に着目し、その三者の関係を軸として議論を進める。これらの勢力は各地方で勢力争いを繰り広げ、全国与党の形成にも大きな影響を与えた。

本研究では、多様であり複雑であった地方エリートの動向を明らかにするため、いくつかの地方についての詳細な実証研究を行い、それらの比較検討を行う。このようなアプローチを採ることにより、既存の研究において十分には明らかにされてこなかった地方レベルにおける政治の実態を明らかにしたうえで、全体像の描出に向けた第一歩を踏み出すことが可能になる。実証研究のフィールドとなるのは沿ヴォルガ地域のサラトフ州、ウリヤノフスク州、サマーラ州、ヴォルゴグラード州である。これら4州は、民族共和国や特殊な産業構造を持つ地方、また補助金に過度に依存する地域には属していない。

このように、本研究は、既存の研究においては明らかにされてこなかった地方レベルの実態を20年余りにわたって追い、そこからロシア政治の変容プロセスを描き出すという点においてユニークであるが、その意義は実証面にとどまるものではない。

第一に、本研究は民主化およびその「失敗」をめぐる議論に密接に関連している。本研究の分析からは、地方レベルにおけるボス政治の残存等のインフォーマルな政治慣行が政党などのフォーマルな民主主義制度の形成を阻害したという既存の議論に対し、フォーマルな領域とインフォーマルなそれとの峻別は難しいということが明らかになる。

第二に、本研究は、ポスト共産主義をめぐる議論にも一定の示唆を与える。ソ連体制からの移行に伴い、「行政の撤退」を遂行しなければならない状況に置かれた州行政府や州都行政府は、住民の不満を回避するために多大な労力を払っていた。これは、旧体制エリートが移行のプロセスにおいて多種多様なリソースを動員できたということに注目が集まり、その優位性が自明視されてきたポスト共産主義研究の前提に疑問を投げかけるものとなる。

第三に、本研究は、「統一ロシア」の登場プロセスの実証研究を通し、「統一ロシア」が選挙の際の実働部隊となる行政府の糾合を試みる際に様々な困難に直面していたことを示す。このような視角は、行政と一体化することによって選挙民動員を行う「政府党」としての側面が強調されてきた「統一ロシア」が抱える弱点を浮かび上がらせるものである。

本研究は第一部（第一章、第二章、補論）および第二部（第三章、第四章、第五章、第六章）から構成される。第一部では、本研究の前提条件を示す。第一章では、地方政治の基本構造が形成された経緯についての検討を行い、第二章において、地方政治の重みがどのように変遷したのかを明らかにする。第二部では、章ごとに一つの地方を取り上げ、各地方における政治の動向および全国政党との関連を描き出す。本研究の検討から得られる知見は以下の通りである。

各地方のケーススタディより、与党の形成プロセスが地方によって多様であったことが明らかになる。全国的には、ソ連解体直後から 1998 年頃までは安定与党の不在に特徴づけられていたが、1999 年下院選挙前の時期から次第に与党形成が活発化し始め、2003 年以降は「統一ロシア」の「圧倒的一党優位」が顕著なものとなった。この間、各地方において観察された経過は以下の通りである。サラトフ州では、強い州行政府が自立性を保つ状況から、州行政府と「統一ロシア」との対抗関係を経て「統一ロシア」のスムーズな浸透が生じた。ウリヤノフスク州は、当初は共産党が強い「赤いリージョン」としての性格を有していたが、ガヴァナンスの機能不全を経験した後、2000 年代に入ってから「統一ロシア」のスムーズな浸透が見られた。サマーラ州では州行政府と州都行政府の競争関係を背景として与党への参加が活発化したが、「統一ロシア」の浸透は困難をきわめ、最終的には両者の対抗関係が与党に内包される形となった。そしてヴォルゴグラード州は当初共産党が強い「赤いリージョン」であり、与党の形成は低調であったが、「統一ロシア」が浸透した結果、政治状況が不安定化した。これら 4 州における与党の形成プロセスはそれぞれに多様な展開をたどったのである。

そのうえで、4 州の比較検討から、州行政府と州都行政府との間の対抗関係の有無が与党の地方レベルへの浸透に大きな影響を与えたことが明らかになる。全国与党の形成が活発化した 1990 年代末以降から 2000 年代初頭にかけては、両者の対抗関係が顕著なものとなっていたサマーラ州およびヴォルゴグラード州においては与党形成の動きが部分的に活発化したが、そうではなかったサラトフ州とウリヤノフスク州においては与党形成の動きは低調であった。「圧倒的一党優位」の成立後は、サラトフ州およびウリヤノフスク州において与党の浸透が比較的スムーズであった一方、サマーラ州とヴォルゴグラード州では与党の浸透が難航し、それが一応の達成をみた後も内紛が絶えなかった。また、共産党地方委員会の位置づけは両義的なものであったが、時として独自の役割を果たした。

沿ヴォルガ地域の事例から明らかになった地方レベルの諸アクターの動きを巨視的に捉えるならば、政治変容の背後にあったメカニズムとして次のような見取り図を描き出すことが可能である。地方レベルの諸勢力は、政権与党に求心力がある間は相争ってそれに加わろうとし、そうでない場合には州内の他のエリート集団との差別化を図ろうとしてかえって分散的になった。政権与党の安定性は地方レベルにおいて独自の力学に基づいて対抗関係を繰り広げる諸勢力との関係如何によって大きく変動し、多くの場合、地方レベルでの諸アクターの動向は政権与党の安定化および不安定化を増幅する方向で作用したのである。

この発見は、1990 年代の「安定与党の不在」状況から 2000 年代に入ってから「圧倒的一党優位」の成立へと至るまでの変容を説明するに際しても示唆的である。本研究において地方レベルに着目して描き出してきたミクロな諸アクターの動きは、個別には散発的で連動しないように見えるが、そうした動きが連なることによってラディカルで地滑りの

な変化がもたらされることがある。ロシアにおいて生じたラディカルな政治変容の一端は、個々のアクターが連邦レベルにおける政治の変化に呼応する形で様々な動きを繰り広げた結果として生じたものと考えられるのである。